広尾学園中学校高等学校

帰国生には最高の環境と条件（16）

国際担当　小山 和智

2007年4月、新生「広尾学園」がスタートしました。「入学満足度 100％」は既に在学している多くの男子からの便りにもあふれています。ますます目が離せない学校です。

● 広尾学園ならではのインターナショナルコース

インターナショナルコースは、2007年４月に開設以来、さまざまな試行錯誤を経て現在の形に至っています。教職員と生徒・保護者が一緒になって「新しい学校を創っていく！」という営みでもあります。

「国語と実技教科を除く全ての科目を英語で学ぶ」という基本は、英語圏の現地校やインターナショナルスクールで学んできた帰国生、とりわけ６年以上そうした教育を受けてきた生徒には願ってもない環境です。すでに頭のなかに構築されている知識構造をそのまま充実させながら、日本語の教科用語等との“compile（つき合わせ編集）訓練”を施していくことで「理想的なバイリンガル」を目指せるからです。

第二言語が日本語とはいうものの、力がついてくれば特進コースの国語授業に参加できますし、大学入試では日本語で志望理由書や小論文が書けるように指導します。また日本地理、日本史、時事問題は日本語でも学べるようになっており、体育や音楽は特進コースの生徒との合同授業です。もちろん、学校行事や部活動、生徒会活動、校則やルールは特進コースの生徒と一緒ですので、日本の伝統・行事・規律・躾などを理解し身に付けることができます。

つまり、インターナショナルスクールでは望めない「日本人としての素養・常識」の涵養、あるいは日本人としてのアイデンティティの確立が可能ですから、日系企業のみならず外資系企業からも求められる「優秀な日本人スタッフ」を目指せるわけです。

● 中高一貫校として目指すもの

日本の中学校と高校で学習すべき内容の多くは重複していて、大事な内容は何度も繰り返して教科書に出てきます。これらを整理し、より効率的に学習できるように工夫した学校が「中高一貫校」「中等教育学校」です。

これを帰国生の立場から眺めると、最も心配されるのが「先取り学習」でしょう。たとえば、広尾学園の「特進選抜クラス」は４年半で高校の教科書まで終えてしまう“超特急”の指導で、国内生にはとても人気があります。しかし、帰国生でそうした環境に入って対等にやれる生徒は、かなり限られています。まして、２年次以降に帰国し編入してやっていける可能性はほとんどなくなるでしょう。

他方、インターナショナルコースは、文部科学省の学習指導要領のスケジュール（５年半で高校の教科書まで終了）を基本に置き、世界標準のカリキュラムにも配慮しています。海外でディスカッション主体の授業や、自分で納得できるまで考え抜くこと等に慣れている帰国生には、落ち着いて勉強できる形です。高校受験はなく、６年間一貫した指導体制の中で、日本語や日本に関する知識の不足を補っていく心理的なゆとりもあります。まして途中から編入する生徒にとっては、心底安心でしょう。

国内の学習塾、受験情報誌などでは「先取り学習」をしない学校は“レベルの低い学校”ということにされています。その学校が中高一貫教育で何を目指しているのかを、ご帰国前によく確認されることをお勧めします。

「小学生対象の入試体験会」

「バレーボール部の練習風景」

「入試の個別相談」